荒神谷青銅器発見40周年
里帰り! 国宝青銅器 ―埋納の地へ―

Homecoming! National Treasures Bronze Artifacts Exhibition - Back to Their Resting Place

国宝展ニュース NO.3

{全体会期: 2025.4.9(水)～2026.1.12(月・祝)}

発行年月日 : 2025年7月30日(水)
発　　行 : 荒神谷博物館

青銅器は銅に錫(すず)、鉛(なまり)などを加えた合金であり、完成したばかりの頃は、黄金色をしています。私たちが「青銅器」と聞いて思い浮かべる、あの青みがかった緑色は、時を経て銅が酸化することでなったものであり、元々の姿ではありません。つまり、私たちが見る古代の青銅器は、「かつての輝きを失ってしまった」姿とも言えますが、その深い緑青(ろくしょう)の色は、見る者を、遥かな古代の世界へと誘う魅力を放っています。

荒神谷博物館では、青銅器の謎にせまる特別展が、7月12日より国宝展と並行して始まりました。悠久の時を経て生まれた緑青の輝きを、古代に思いをはせて御覧頂ければ幸いです。

展示の様子　銅剣 B61・B62・B63
銅鐸 2号
銅矛 9号 10号
(文化庁蔵・古代出雲歴史博物館保管)
[第3期公開期間:7/30(水)～9/23(火・祝)]

学芸員の“推し”！ ～キズは“兄弟”のあかし～

青銅器の鋳型(いがた)は、高温で溶かした青銅を流し込むため、複数回使用すると、次第にヒビや傷が付いてきます。これを「范傷(はんきず)」といいます。范傷はそのまま青銅器に写し出されるため、同范(どうはん)、すなわち「同じ鋳型で鋳出(いだ)された製品」を特定する手がかりのひとつとなります。

さて、第3期の“推し”は、“2号銅鐸”です。2号銅鐸は京都市梅ヶ畑(うめがはた)で出土した4号銅鐸と、複数箇所の范傷が共通していることから、両鐸は同じ鋳型から生まれた「兄弟」であると考えられています。その梅ヶ畑4号銅鐸は、京都文化博物館からお借りして、今夏展示しています。今回の2号銅鐸の里帰りで、兄弟再会となりました。

左:荒神谷2号銅鐸 (文化庁蔵・古代出雲歴史博物館保管)
右:梅ヶ畑4号銅鐸(京都府蔵・京都文化博物館保管)※
(※8月31日まで展示)

荒神谷発掘物語 その③ ～残りものには「青銅」がある？～

銅剣が発掘された翌1985年7月、第二次発掘調査が開始されました。発掘に先立って、銅剣が埋まっていた丘陵斜面を中心に、青銅器探査が実施されました。発掘は銅剣出土地点下の谷底から始まり、その後向かい側斜面、その他金属反応のあった箇所で行われましたが、青銅器は見つかりません。あきらめの色が広がり始めた頃、発掘地点として「最後に唯一残っていた」という、銅剣出土地から谷奥側7～8mの場所を掘ったところ、今度は銅鐸を発見。最終的に、全国にも例がない銅鐸6個、銅矛16本が同時埋納されている事が判明。誰もが予想しなかった驚きの発掘結果となったのです。

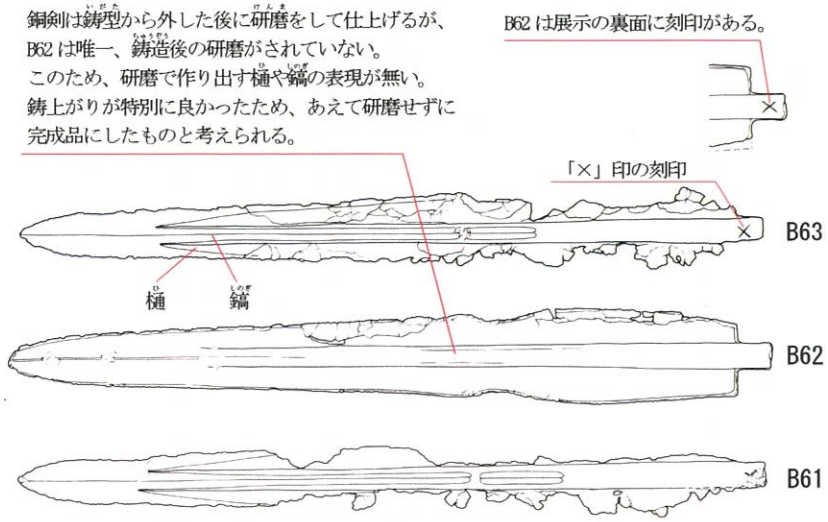
(文：学芸員N)

銅鐸・銅矛の出土状況
(画像提供:島根県教育庁埋蔵文化財調査センター)

里帰り！国宝青銅器 ―埋納の地へ―

Welcome Home! National Treasure Bronze Artifacts - Returning to Their Ancient Origins

銅剣

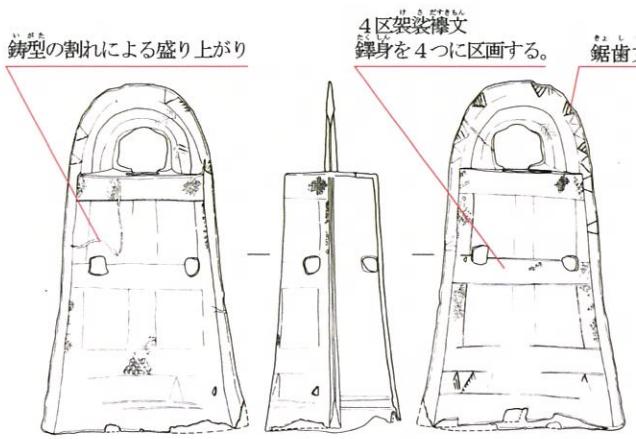


358本出土したうちの3本で、この3本は隣あって埋納されていました。
荒神谷遺跡の銅剣はすべて「中細形C類」と呼ばれるタイプです。

長さの違い／プロポーションの違い

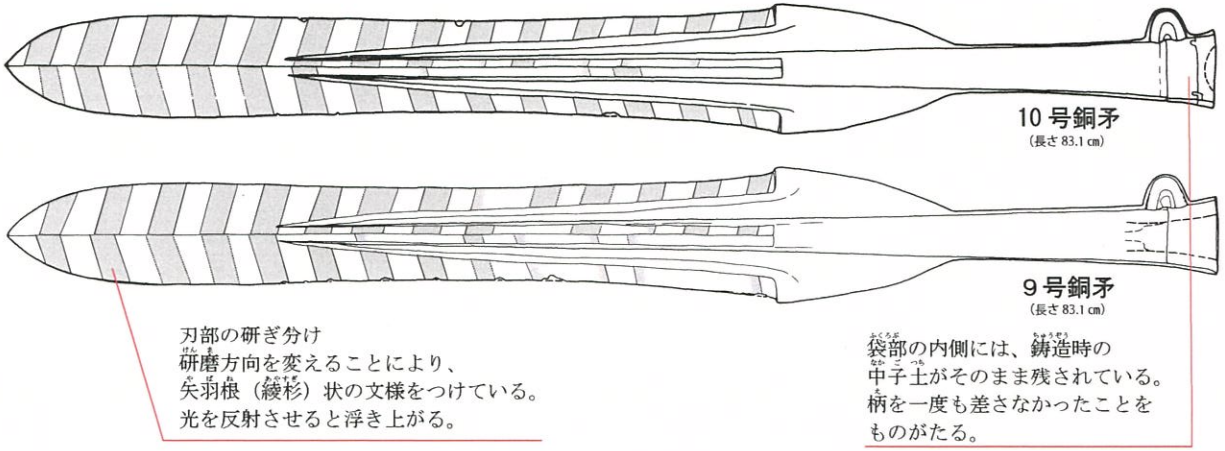
358本の銅剣を鋳造するのに、約220個の石鋳型が使用されました。銅剣はどれも同じように見えるかもしれませんが、同じ鋳型から作られたもの（同笵銅剣）が少ないため、じつはかなり個体差が大きく、バリエーションがあります。

銅鐸



2号銅鐸　（展示の裏面）

6個出土したうちのひとつです。
この2号銅鐸と同笵（兄弟）の京都市梅ヶ畑4号銅鐸は企画展示室で展示中です。

銅矛

16本出土したうちの2本です。ともに「中広形」と呼ばれるタイプで、荒神谷遺跡の銅矛のなかで最も大きな部類です。
9号・10号銅矛は同じ鋳型から作られた可能性があります。